



▲山林にはヨモギやお茶の葉、鹿、イノシシなど自然の動植物であふれている。五感をフル稼働させれば奥深い自然を体感できる場所だ



▲窯焚きの参加者にチェンソーの使い方を教える浅見さん



▲浅見さん必需品の地下足袋。体が一割は軽くなるため山では究極の履物だそう

人のつながりが山を守る



きこり 樵・そま師

浅見 和夫さん

先祖から受け継いだ 80ヘクタールの山林を 42年間守り続ける 9代目山主。高所作業での特殊伐採を得意とする「樵(そま師)」としても活動している。[第5回 聞き書き甲子園(平成 18年度)]に「若き与作」として登場。

日本人が古くから育んできた森とともに生きる知恵や技を次世代に伝えようと、「森の名手・名人」の技や人となりを高校生が聞き書きし記録する、森の「聞き書き甲子園」が始まってから今年で15周年。情報誌「林野」では、今も現役で活躍する歴代の「名手・名人」をご紹介します。

埼

玉県の高崎線本庄駅からバスで40分ほどの場所にある、自然豊かな町・神川町(旧神泉村地区)。そこには、42年にわたり樵(そま師)として山林に心血を注いできた浅見和夫さんが暮らしています。

幼い頃から林業を営む家の後継者として育った浅見さんは、船乗りになる夢を諦め、大学卒業後に半ば投げやりに林業の世界に足を踏み入れました。しかし、ある出会いをきっかけに林業の面白さにはまっていきます。それが、家業を継ぐ前に2年間研修生として受け入れてくれた岐阜県の石原林材です。

「林業の奥深さを教えてくれた石原林材は、とにかく山を大切にしていた。当時は広葉樹の天然林を伐採し、そこに成長が早い針葉樹の人工林を植える拡大造林が主流だった。木材を生産するために木を植え、育つと一斉に収穫することが従来の林業だったけど、そんなことをしていると良質な水や土砂災害を防ぐ機能などが破壊され、健全な森林が育たない。だから、石原林材は皆伐しないことを根底に置いた林業を行っていた。伐採することを目的として育てるのではなく、木の命がある限り、活力に満ちた森林を育てる。これは、今でも私にとって林業をする上で大事な核となっているんだ」

現在、浅見さんの所有する山林では、埼玉森林サポータークラブが森林ボランティアの拠点として建設した「くるみ小屋」や、芸術家の堀越千秋氏が築いた陶芸の窯「千秋窯」などを中心に、さまざまな活動が実施されています。また、浅見さんが理事長を務める地域おこしを指す「NPOきぬやの会」では、応募があった世界各国のアーティストに地域と触れ合いながら作品制作が行えるアトリエを提供する、アートレジデンシーを応援しています。



くるみ小屋



▲「くるみ小屋」の前で森林サポーターの皆さんと。近くには手づくりの露天風呂や畑もある



▲「葉っぱを裏返せばヒノキとサワラの見分けがつくよ」と浅見さんが教えてくれた。よく見ると、葉の中にヒノキは「Y」、サワラは「X」の字が浮かぶ。葉先のとがり具合にも特徴があるようだ

これから元気に育ってくれよな!

▼ここには「かな馬の会」のメンバーで世話する和種馬もいる。馬とのふれあいを通じて森林の楽しさを感じることができる



▲浅見さんの山林で間伐した木と共に

歴代「名手・名人」の聞き書き結果はコチラ
▼ <http://www.foxfire-japan.com/>
今年度の「聞き書き甲子園」高校生募集は7月1日切です。

「この樵人生、ここまでやってこられたのは、出会った人たちのおかげだから」と浅見さんは笑います。山を大切にしてくれる人々への感謝を忘れない。それは、浅見さん自身が山に対し深い愛情を持っている証といえるでしょう。

こうして、浅見さんは「一人では山を守り、伝えることはできない」と森林組合の再立ち上げに乗り出しました。都会から訪れた林業に興味がある若者と共に働き、惜しまず技術を教えるとともに、高木を倒さずに伐採する高度な技術が必要な特殊伐採にも挑みました。その結果、何人も人がこの地に定着し、高い技術力を備えた樵として独立もしています。森林組合の再立ち上げ後も山に興味を持ってもらえるよう、森林サポータークラブをはじめ多方面から積極的にアプローチしてきました。このような取組により、多くの人々に必要とされる山林へと発展していったのです。

今でこそ、浅見さんの元には各活動に参加するために国内外から多くの人々が集まりますが、そこに至るまでの道のりは決して簡単ではありませんでした。「林業は、CO₂から土と水と太陽の力により木材を生産する仕事。生産性が低い上、当時3K労働といわれたこの仕事に就く者は少なく、林業に将来はないといわれていた。40歳を迎えた頃、ふと周りを見るとそこには間伐が満足にされず、暗く荒廃した林が広がっていた。同じ悩みを語り合える仲間が少なく、林業の技術を受け継ぐ者もいない。本当に寂しかったなあ」